

# 「ほめ」は談話展開にどのように関わるか

— DLA <話す>におけるテストターの「ほめ」に着目して —

永田良太

(2017年10月4日受理)

The Relationship between Japanese Compliments and Discourse Development:  
Analysis of Tester's Compliments in Dialogic Language Assessment

Ryota Nagata

**Abstract:** This study clarified the relation between Japanese compliments and discourse development by analyzing a tester's compliments in dialogic language assessment (DLA). By focusing on the type of compliment and its expression, this paper revealed the following two points: 1) specific kinds of compliments ("envy", "facts", "appreciation") are used in the specific environment of the discourse; and 2) when compliments are expressed by "feelings", specific expressions are used regardless of the environment. However, when compliments are expressed by "evaluation", the expression varies according to the environment. These results show us that various kinds of compliments are used properly depending on the aspects of the discourse development. In other words, by using various kinds of compliments in each environment, conversation participants can understand the aspects of the discourse.

Key words: compliments, discourse development, Dialogic Language Assessment (DLA),  
introduction part, task part

キーワード：ほめ、談話展開、対話型アセスメント (DLA)、導入部、タスク部

## 1. 研究の目的

「ほめ」は相手のポジティブ・フェイスを満たす発話行為であり (古川2007), 対人コミュニケーションにおいて, 人間関係を構築する上で重要な役割を果たす。日本語の「ほめ」に関しては, これまで主に表現レベルで研究が行われ, その特徴が明らかにされてきた。例えば, 大野 (2003) では, 「事実の指摘」, 「感情の表明」, 「羨望の表明」, 「お礼を述べる」, 「お祝い・挨拶・決り文句を述べる」, 「非言語表現」が「ほめ」に用いられることが指摘されている。では, それらの「ほめ」表現は談話が展開される過程でどのように用いられているのであろうか。

「ほめ」を談話レベルで分析したものとして永田

(2014) が挙げられる。永田 (2014) では「ほめ」を談話レベルでとらえ, 会話の参加者相互の「ほめ」を量的に分析することで, 「ほめ」が参加者相互のフェイス・バランスの維持に関わることが指摘されている。「ほめ」に関する談話レベルの研究は, そのように対人関係の構築という観点からのものに限られており, 「ほめ」が談話のどのような局面に見られ, そこに見られる「ほめ」にはどのような特徴があるのかという談話展開との関わりについてはいまだに明らかにされていない。

この問題について, 本研究では談話展開の構造が明確な対話データを分析資料として, 談話の展開構造における「ほめ」の出現の有無およびそこで用いられる「ほめ」の種類と表現という観点から明らかにする。

## 2. 分析資料

本研究では「Dialogic Language Assessment (対話型アセスメント)」(以下、DLA)と呼ばれる外国人児童とテスターによる対話を録音し、文字化したものを分析資料として用いる。DLAは外国人児童の日本語力を対話の中で測ることを目的としたものであり、テスターに導かれながら、児童が日本語による様々なタスクを行うというものである。本研究においては、主導的な役割を担うテスターの「ほめ」に着目し、談話を展開する上で、「ほめ」がどのように用いられているかを明らかにする。

本談話資料は、タスクが展開される前に当該の児童に関することを尋ねたり語彙カードを用いて語彙力を確認したりする「導入部」と日本語で友達を誘ったり物語について語ったりするなどの様々なタスクが実施される「タスク部」という二つの部分に大別される。次節で述べるように、導入部とタスク部の境界およびタスク部内におけるタスクとタスクとの境界には明示的な言語表示が見られる。このように各部分の境界が明確である本談話資料は、出現位置に着目して談話展開との関わりを明らかにしようとする本研究に適した資料であると言える。また、そこで実行される各タスクも同一のものであり、均一のデータが複数得られるという点も、本談話資料の利点であると言える。

会話の参加者に関して、本談話資料は日本語を母語とする大学4年生2名、大学院生1名、大学教員1名の計4名がテスターとして小学校2年生～4年生の15名の児童に対してDLA<話す><sup>1)</sup>を行ったものである。テスターと児童の学年の関係は任意であり、テスターと児童が1対1で15分～20分程度行われた。児童の国籍は中国籍の者もいれば日本国籍を取得している者もいるなど様々であるが、日本語能力に関してはいずれの児童も母語レベルに近く、日本語に関する支援を受けずに在籍学級で授業を受けている。

## 3. 分析と考察

### 3.1 談話における「ほめ」の出現位置と種類

先に述べたように、本談話資料には、児童のことに関する質問や語彙力の確認が行われる「導入部」とタスクが具体的に展開される「タスク部」が存在しており、導入部とタスク部の境界には明示的な言語表示が見られる。以下の例(1)は導入部からタスク部に移行する部分である。なお、以下の例におけるAはテスターの発話であり、Bは児童の発話である。

例(1)

A: 55(番)。

B: 高い。<sup>①</sup>

A: うん。すごいたくさん言えたね。すごいです。<sup>②</sup> 次いってみるよ。このカードにします。<sup>③</sup>  
いい?これからカードを見て、先生と少しお話をします。分からないときは分からないと言ってください。いい?ここはどこですか?

B: 教室。

例(1)では、まず、導入部における語彙力の確認が行われており、「55番」のカードに描かれた語彙について「高い」という児童の答えが行われている(下線部①)。そのような児童の発話を受けて、テスターであるAは「すごいたくさん言えたね。すごいです。」(下線部②)と「ほめ」によって導入部を終結させるとともにその後の「次いってみるよ。このカードにします。」(下線部③)という発話によってタスク部に移行することを明示している。

本談話資料においては535例のテスターによる「ほめ」が見られたが、それらが導入部とタスク部のいずれに見られたかを表したものが表1である。

表1 DLA<話す>における「ほめ」の出現位置

出現位置	導入部	タスク部	合計
出現数	129 (24.1%)	406 (75.9%)	535 (100%)

表1を見ると、導入部よりもタスク部に多くの「ほめ」が見られることが分かる。では、そこにはどのような「ほめ」が見られるのであろうか。以下においては「ほめ」の種類という観点から導入部とタスク部に見られた「ほめ」について分析を行う。

「ほめ」の種類に関して、本談話資料においては、大野(2003)で指摘されている「事実」、「感情」、「羨望」に加えて、「評価」と「ねぎらい」が見られた。「評価」や「ねぎらい」が新たに見られ、大野(2003)で指摘される「お礼」や「お祝い・挨拶・決り文句」が見られなかったのは、タスクを遂行しながら日本語力の測定を目的としたテスターと児童との対話という談話の性格が関わると考えられる。以下にそれぞれの例を示す。

事実:「全部言えたね」、「時計読めるんだね」、「色々なスポーツできるんだね」など

感情:「すごいね」、「びっくりしちゃった」、「楽しかった」など

羨望:「いいなー」、「うらやましい」、「楽しそう」など

評価:「いいね」、「上手にできました」、「よく知ってる

ね」など  
 ねぎらい：「頑張ったね」、「一生懸命やりました」など

本談話資料に見られたこれら5種類の「ほめ」が先に見た導入部とタスク部にどのように見られたかをまとめたものが表2である。なお、表中の( )内の数字はそれぞれの出現環境に見られた「ほめ」の総数に占める各「ほめ」の割合であり、以下の表3～表5においても同様である。

表2 DLA <話す>における「ほめ」(種類別)

種類	導入部	タスク部
評価	67 (51.9%)	199 (49.0%)
羨望	11 (8.5%)	19 (4.7%)
感情	37 (28.7%)	157 (38.7%)
事実	11 (8.5%)	29 (7.1%)
ねぎらい	3 (2.3%)	2 (0.5%)
合計	129 (99.9%)	406 (100%)

表2を見ると、導入部とタスク部に見られる「ほめ」の種類および出現割合は類似していることが分かる。では、導入部とタスク部のそれぞれの環境内での「ほめ」の現れ方およびそこで用いられる「ほめ」の表現も類似しているのであろうか。以下においてはこの点に関して、導入部とタスク部のそれぞれについて、内部の構造に着目してさらに分析を行う。

### 3.2 導入部における「ほめ」

#### 3.2.1 導入部における「ほめ」の出現位置

先に述べたように、導入部においては児童のことに関する質問や語彙力の確認が行われるが、そのような導入部には、具体的なやり取りが展開される「主要位置」に加えて、導入部が始まる「開始位置」および導入部が終了する「終結位置」が存在する。先に見た例(1)では、「すごいです。」という発話が終結位置に置かれ、導入部が終結するとともに、直後の「次いてみるよ。」という発話によってタスク部が開始されている。そのような導入部の中のどの位置に「ほめ」が見られるかを「ほめ」の種類別にまとめたものが表3である。

表3 導入部に見られた「ほめ」(種類別)

種類	開始位置	主要位置	終結位置
評価	0 (0%)	28 (52.8%)	39 (51.3%)
羨望	0 (0%)	11 (20.8%)	0 (0%)
感情	0 (0%)	13 (24.5%)	24 (31.6%)
事実	0 (0%)	1 (1.9%)	10 (13.2%)
ねぎらい	0 (0%)	0 (0%)	3 (3.9%)
合計	0 (0%)	53 (100%)	76 (100%)

表3を見ると、導入部における「ほめ」は主要位置と終結位置に見られることが分かる。「ほめ」の種類と出現位置の関係に着目すると、「評価」と「感情」は主要位置と終結位置のどちらにも見られ、出現位置に関する違いは見られない。一方、「羨望」、「事実」、「ねぎらい」に関しては談話展開上の出現位置の違いが見られ、「羨望」が主要位置にのみ見られるのに対して、「事実」と「ねぎらい」は終結位置に特徴的に見られる。先に例示したように、「羨望」は「いいなー」や「楽しそう」といった表現によって「ほめ」が表されるものである。以下の例(2)では、下線部の「あー、いいなー」によって直前の「オセロをする」ことへの関心が示されるとともに、当該のトピックにもとづいて児童に関する質問(「誰とオセロするの?」)が継続されている。

#### 例(2)

- A: 部屋で、何してるの?  
 B: うーん、時々オセロとかしてる。  
 A: あー、いいなー。誰とオセロするの?  
 B: えーっと、えーX君と、えっと、し、してた時もあった。

このように、「羨望」の「ほめ」が行われた場合には、その後、導入部がさらに継続されるという展開が見られた。すなわち、「羨望」の「ほめ」は導入部が継続することを示すマーカーの役割を果たしていると言える。

一方、「事実」と「ねぎらい」はいずれも導入部の終結位置に見られた。以下の例(3)は導入部で行われる語彙力の確認を受けて、「ほとんど(解答することが)できた」(下線部)ことを伝える「事実」の「ほめ」が終結位置に見られた例である。また、例(4)は、同じく終結位置に「頑張ったね」(下線部)という「ねぎらい」の「ほめ」が見られた例である。いずれの例においても、その直後にタスク部への移行が明示的に行われており、導入部の終結位置に見られていることが分かる。

#### 例(3)

- A: 全部できた、ほとんどできたじゃん。はい、じゃあ次はカード、今度おっきいカード使います。

#### 例(4)

- A: 全部できた、こんなにやったよ。頑張ったね。よーし、じゃあ次はね、カードを使ってお話していきましょう。

このように、「事実」や「ねぎらい」の「ほめ」は、他の種類の「ほめ」とは異なり、導入部の終結位置に特徴的に見られる。このことをふまえれば、これらの「ほめ」は本研究で分析を行った対話型の談話において、導入部が終了することを示唆する働きをしていると言えよう。

これまでは導入部の特定の出現環境に特徴的に見られる「羨望」、「事実」、「ねぎらい」という「ほめ」について見てきたが、ともに主要位置と終結位置に見られる「評価」と「感情」に関しては、出現環境による違いが見られるのであろうか。以下においてはこの点について、それぞれの「ほめ」に用いられる表現という観点から分析を行う。

### 3.2.2 導入部における「評価」と「感情」の「ほめ」表現

まず、導入部の主要位置と終結位置に見られた「評価」の「ほめ」について、そこにどのような表現が用いられているか分析を行う。「評価」の「ほめ」に関して、主要位置では以下の7種類の「ほめ」が見られた。なお、( )内の数字は主要位置に見られた「評価」の「ほめ」の総数に占める各表現の出現割合であり、これ以後の表現の例示に際しても同様である。

いい系 (71.4%), すごい (7.1%), すばらしい (7.1%),  
かわいいね (3.6%), えらいね (3.6%), よく知って  
るね (3.6%), ばっちり (3.6%)

上記の「いい系」には「いいね」や「いいよ」といった表現が含まれるが、このような「いい系」が導入部の主要位置では最も多く用いられていた。一方、導入部の終結位置では以下のような13種類の表現が「評価」の「ほめ」として用いられていた。

さすが (28.2%), ばっちり (15.4%), すらすら進ん  
だね (12.8%), よくできました (10.3%), 余裕だね  
(7.7%), すばらしい (5.1%), 完璧 (5.1%), いい系  
(2.6%), よく聞こえるよ (2.6%), しっかり答えられ  
るね (2.6%), テンポがいいね (2.6%), はやかった  
ね (2.6%), オッケー (2.6%)

このように、「評価」の「ほめ」に用いられる表現の種類に関して、導入部の主要位置と終結位置とでは違いが見られ、終結位置においては多様な表現が「評価」の「ほめ」に用いられていた。また、それぞれの環境で用いられる表現の中でも、主要位置においては「いい系」への偏りが見られた。一方、終結位置にお

いては、「さすが」や「ばっちり」など多く用いられる表現も見られたが、主要位置のような特定の表現への偏りは見られなかった。

次に、「感情」の「ほめ」に関して、導入部の主要位置に見られた13例の表現はすべて「すごいね」、「すごいな」、「すごい」といった「すごい系」の表現であった。終結位置に関しても、24例中23例は「すごい系」の表現であり、それ以外の表現は「びっくりした」の1例のみであった。ここから、導入部に見られる「感情」の「ほめ」に関しては、主要位置や終結位置といった談話展開上の位置に関わらず、特定の表現が用いられていることが分かる。

### 3.3 タスク部における「ほめ」

#### 3.3.1 タスク部における「ほめ」の出現位置

先に見たように、導入部においては、「羨望」、「事実」、「ねぎらい」といった談話展開上の出現位置が異なる「ほめ」が見られる。また、「評価」の「ほめ」のように、出現位置に違いは見られないものの、そこで用いられる表現レベルで談話展開の局面に応じて使い分けられているものも見られる。では、具体的なタスクが展開されるタスク部においてはどのような特徴が見られるのであろうか。

ここで、タスク部内の構造に着目すると、タスク部は日本語で友達を誘ったり物語について語ったりするなどの具体的なタスクが展開される部分とそれらのタスクがすべて終了し、総評が述べられて会話が終結される部分によって構成されていることが分かる。両者は談話展開上の性質が異なるため、以下においては、前者を「タスク展開部」、後者を「終結部」と呼び、区別する。先に述べたように、タスク部には406例の「ほめ」が見られたが、そのうち375例がタスク展開部に見られ、31例が終結部に見られた。

まず、タスクが具体的に展開される「タスク展開部」のどの位置に「ほめ」が見られるかについて分析を行う。タスク展開部を構成するそれぞれのタスクには、先に見た導入部と同様、各タスクが開始される「開始位置」、タスクに関するやり取りが行われる「主要位置」、当該のタスクが終結する「終結位置」が存在する。以下に例を示す。

例 (5)

B: こっち (の車) は火事のとときで、こっち (の車) は、えっと、怪我したとき。

A: あーなるほど。確かに。すごいねー。<sup>①</sup> じゃあ、もう1個カードがあるから、今度こっちね。<sup>②</sup>

例(5)においては、絵カードを用いて「消防車」と「救急車」の説明を求めるタスクが行われているが、「あー、なるほど。確かに。すごいねー。」(下線部①)というAの発話によってそのようなタスクが終結するとともに、直後の「じゃあ、もう1個カードがあるから、今度こっちね。」(下線部②)という発話によって新しいタスクが開始されている。

タスク展開部を構成する各タスクにおいて、「ほめ」がどのような位置に見られたかを「ほめ」の種類別にまとめたものが表4である。

表4 タスク展開部に見られた「ほめ」(種類別)

種類	開始位置	主要位置	終結位置
評価	0 (0%)	21 (31.8%)	169 (54.9%)
羨望	0 (0%)	4 (6.1%)	16 (5.2%)
感情	0 (0%)	35 (53%)	111 (36%)
事実	0 (0%)	6 (9.1%)	12 (3.9%)
ねぎらい	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
合計	0 (0%)	66 (100%)	308 (100%)

導入部において出現位置に違いが見られた「羨望」、「事実」、「ねぎらい」に関して、表4を見ると、「羨望」や「事実」は導入部に見られたような終結位置への出現の偏りは見られない。「ねぎらい」はタスク展開部においては1例も見られなかった。このような終結位置における違いは、導入部の「終結位置」とタスク展開部の「終結位置」が性格を異にするためであると考えられる。

導入部の終結位置においては、当該の児童に関することを尋ねたり語彙カードを用いて語彙力を確認したりとタスクが開始される前の準備段階が完了したことが表される。これに対して、タスク展開部の終結位置としてここで分析されているものは、先の例(5)に示したように、複数存在するタスクのそれぞれの終結に関する部分であり、その直後には新たなタスクが開

始されている。従って、導入部の終結位置に相当するタスク部全体の終結は以下に分析する「終結部」がその役割を担っていると考えられる。この関係を図示したものが図1である。

以下においては、「終結部」に着目して分析を行い、導入部の終結位置との比較を行う。「終結部」に見られた「ほめ」の種類別に表したものが表5である。

表5 終結部に見られた「ほめ」(種類別)

種類	出現数
評価	7 (22.6%)
羨望	0 (0%)
感情	11 (35.5%)
事実	11 (35.5%)
ねぎらい	2 (6.5%)
合計	31 (100.1%)

表5を見ると、タスク展開部の終結位置(表4)に比べて、終結部においては「事実」の「ほめ」が多く用いられていることが分かる。このように「事実」の「ほめ」が特徴的に見られるという点は、先に表3で見た導入部の終結位置と共通する。先に述べたように、導入部の終結位置はタスク部に入る準備段階が終了したことを表す。また、「終結部」は、先の図1に示されるように、タスク部を含めたすべての会話が終了したことが表される部分である。このような環境に特徴的に見られる「事実」の「ほめ」は「導入部の終わり」や「会話の終わり」をそれぞれ示しており、談話展開の大きな局面が終結することを示すマーカーとしての役割を果たしていると考えられる。

タスク展開部の終結位置には見られず(表4)、導入部の終結位置(表3)と終結部(表5)にのみ見られる「ねぎらい」の「ほめ」も、同様に、終結に関わる働きを有していると推測されるが、出現数が少ないため、この点については今後さらに考察を行う必要がある。

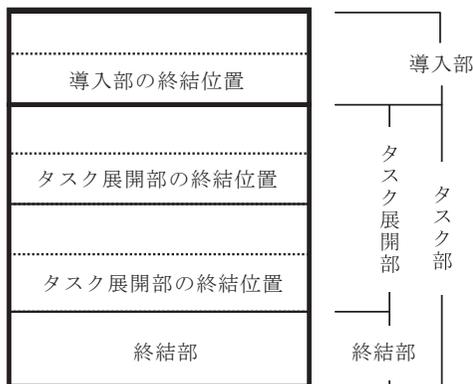


図1 談話の展開構造における終結位置と終結部の関係

### 3.3.2 タスク展開部における「ほめ」の表現

先に表4で見たように、タスク展開部においては、「評価」は終結位置に、「感情」は主要位置にそれぞれ見られやすい傾向が認められる。では、そこで用いられる表現についても違いが見られるのであろうか。以下においては、タスク展開部の主要位置と終結位置に見られた「評価」と「感情」の「ほめ」について、そこにどのような表現が用いられているかを分析し、3.2.2で明らかにした導入部の結果と比較する。

まず、タスク展開部に見られた「評価」の「ほめ」に関して、主要位置では以下の5種類の表現が用いられていた。

よく知ってるね (52.4%), いい系 (23.8%), くわしいね (14.3%), すごい (4.8%), 完璧 (4.8%)

このように、タスク展開部の主要位置においても、導入部と同様、特定の表現への偏りが見られる。導入部の主要位置に多く見られた「いい系」に加えて「よく知ってるね」という表現も多く見られるという点は異なるが、それら特定の「ほめ」表現が多用されているという点で共通している。

一方、タスク展開部の終結位置では、以下に示すような25種類の「評価」の「ほめ」表現が用いられていた。

上手だね (25.4%), よく～系 (16.6%), さすが (14.2%), くわしいね (4.7%), すらすら言えたね (5.3%), 面白いね (4.1%), いい系 (4.1%), 完璧 (5.3%), すごい (3.6%), ちゃんと質問できるね (3.0%), さくさく進むね (2.4%), えらい (2.4%), テレビみたいでした (1.2%), 分かりやすかった (1.2%), 頑張ってるね (0.6%), 健康的な生活だね (0.6%), すばらしい (0.6%), 良い点に気がつきました (0.6%), お姉さんだね (0.6%), しっかりしてる (0.6%), 素敵な紹介でした (0.6%), 強い (0.6%), 早いな (0.6%), しっかり誘えたね (0.6%), かっこよかった (0.6%)

「評価」の「ほめ」に関して、終結位置に多様な表現が見られる点は先に見た導入部と同様である。導入部の終結位置に見られた「さすが」に加えて「上手だね」や「よくできたね」、「よく覚えているね」などの「よく～」系の表現も多く用いられていたが、主要位置のような特定の表現への偏りは見られなかった。この点も導入部の終結位置に見られた「評価」の「ほめ」の特徴と同様である。

このように、「評価」の「ほめ」に関して、タスク展開部の主要位置においては限られた種類の表現が用いられているのに対して、終結位置においては様々な表現が使い分けられているという導入部と同様の特徴が見られた。

次に、タスク展開部に見られた「感情」の「ほめ」表現に関して分析を行う。導入部の主要位置に見られた「感情」の「ほめ」表現はすべて「すごい系」の表現であったが、タスク展開部の主要位置に見られた「感情」の「ほめ」も35例すべてが「すごい系」の表現であった。また、タスク展開部の終結位置に関しても、111例中104例は「すごい系」の表現であり、それ以外の表現は「びっくりした (5例)」、「わくわくした (1例)」、「楽しかった (1例)」であった。

このように、タスク展開部における「感情」の「ほめ」に関しては、主要位置においても終結位置においても「すごい系」という特定の表現が用いられており、導入部と共通する特徴が見られた。

これまで見てきたように、導入部とタスク展開部のいずれにも多く見られる「評価」と「感情」の「ほめ」には、そこで用いられる表現に関して共通点が存在する。具体的には、導入部においてもタスク展開部においても、「評価」の「ほめ」が行われる際には、主要位置では特定の表現に偏りが見られるのに対して、終結位置では多様な表現が用いられているということである。一方、「感情」の「ほめ」に関しては、導入部においてもタスク展開部においても、出現位置に関わらず、「すごい系」の表現が用いられるという共通の特徴が認められた。

#### 4. まとめと今後の課題

本研究では、児童とテスターによる対話のデータに見られる「ほめ」に着目して、「ほめ」と談話展開との関わりについて明らかにした。本研究では、テスターの「ほめ」に着目して分析を行ったが、「ほめ」の種類に着目することで、導入部における「羨望」、「事実」、「ねぎらい」のように談話展開上の特定の位置に特徴的に見られる「ほめ」があることが明らかになった。また、そこで用いられる表現に着目すると、「感情」のように出現位置に関わらず特定の表現が用いられるものもあれば、「評価」のように出現位置が主要位置であるか終結位置であるかによって、用いられる表現が異なるものも見られた。これらのことは、様々な「ほめ」が談話展開のそれぞれの局面に応じて使い分けられていることを示すものである。換言すれば、これらの「ほめ」が用いられることで、談話展開のどのような局面であるかが参加者相互に共有されているとも言えよう。

従来、「ほめ」に関しては、文レベルの分析に加えて、談話レベルで対人関係やポライトネスの観点から分析が行われてきたが、本研究で明らかにしたように「ほめ」は談話展開にも関わることをふまえると、今後はこのような観点からの分析が求められるであろう。本研究においては談話の展開構造が明確なデータを資料として分析を行ったが、他の種類のデータを分析することで、「ほめ」と談話展開との関わりがさらに明らかになるとと思われる。この点については今後の課題としたい。

## 【注】

- 1) DLA では<話す>, <読む>, <書く>, <聴く>に関する各タスクが行われるが, 本研究では, そのうちの<話す>タスクについてのデータを分析する。

## 【参考文献】

- 大野敬代 (2003) 「人間関係からみた「ほめ」とその工夫について—シナリオにおける「働きかけ表現」として—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』(10-2), pp.337-346, 早稲田大学大学院教育学研究科  
永田良太(2014)「談話のトピック展開から見た「ほめ」

『表現研究』(99), pp.30-39, 表現学会  
古川由理子 (2007) 「「ほめ」の返答とポジティブ・フィードバック—日本語教育への応用を目指して—」『問谷論集』(1), pp.99-114, 日本語日本文化教育研究会

## 【謝辞】

本研究は, 2016年度 JSPS 科研費 JP25284096 (基盤研究 (B) 『アーティキュレーションを保証する言語能力アセスメント実施支援システムの構築』研究代表者: 渡部倫子)および2017年度 JSPS 科研費 JP16H03435(基盤研究 (B) 『多文化共生社会におけるホストパーソン・支援者の接触支援スキルと意識の変容』研究代表者: 義永美央子) の助成を受けたものである。